ミニデイサービス便り

人は支え合ってこそ生きられる

「Kさんが呼んでおられますので、降りて来て下さい」と事務所の階下ふれあい広場から呼び出しがかかった。今日は、今年最後のミニデイサービスの日です。Kさんに御用を尋ねたら「厨房の人もみんな出て来るように言って下さい」とおっしゃる。言われる通りにKさんの前に勢揃い。

突然、Kさんが深々と頭を下げられた。

「本当に皆さん、今年1年お世話になりました。本当にありがとうございました」と、声がつまり、涙で顔が歪み、細い肩が震えておられる。

Kさんは一人暮らし。会報131号でご紹介させていただいた方で、「まごころ」とのお付き合いは5年近くになります。しかし、他の人とのかかわりを殆どもたれる事なく過ごされておられ、当ミニデイサービスにおいで下さるまでにも4年の歳月が必要だった方です。ミニデイにおいでになられてからのKさんの素顔に、私達は驚かされる事ばかりでした。絵、歌、マージャン、お話しなどどれもお上手。生き生きと穏やかに話されるのには驚くばかりでした。

人が集い、気遣い、友が出来る、人の温もりがこんなにも人を変える力があるのだと実感していました。

「はじめて、人は一人では生きられないと分かった。人という字は、支え合っているよね。今まで、自分は自分だけという考えだった」と、しみじみと言われる。

今年、生まれて初めて年賀状を書いて下さった。

「Kさん絵が上手いのだから年賀状に絵を描いて下さいよ」と申し上げたら「いやー書いたことがないので」とおっしゃっておられた。

ところが、次のデイの日には年賀はがきを持参、一生懸命に見事な鶏を描かれていた。大事そうにして見せて下さった。Kさん、私達こそ本当にありがとう。2005年も健やかな1年でありますようお祈り申し上げます。

1月のミニデイサービスは

保育園　1/13・27　事務所　1/6・11・18・20・25

当会の利用者さん

堀場笑子さん

「中日歌壇」輝く年間賞最優秀受賞

当会が長い間、ケアに入らせていただいています堀場笑子さんが、この程、中日新聞中日サンデー版の中日歌壇に投稿、入選された中から、年間の最優秀賞に選ばれました。心からお祝い申し上げます。笑顔がとてもいい堀場さん、これからも詠み続けて下さい。本当におめでとうございます。

中日新聞12／27朝刊に掲載

いつも枕元にはペンを

堀場　笑子さん(82)　一宮市大宮

「何げない毎日を詠んだだけなので、驚くやら恥ずかしいやら」と受賞の知らせにはにかむ。

六十歳のとき、長年開いてきた学習塾を閉めたのが、短歌を始めたきっかけ。以後、「選ばれるとうれしくて」と応募を続けてきた。

この間、母と姉をみとってきた。「介護はつらかったけれど、誰もいないと一日は長いですね」。心のすき間を埋めるためにも歌作を続ける。

受賞作「メモどおり朝の仕事を終へし今端居して聞く蟬の合唱」は、毎朝の変わらない風景を歌った。

翌朝の仕事を忘れないよう寝る前にメモに書き出し、起床して洗濯、皿洗いを済ます。ほっと一息ついて、流れ出す穏やかな時間。

「これを励みに詠み続けたい」。いつでも書けるよう、枕元にはペンを置く。

（横井　武昭）

～～～～～ある外科医の独り言～～～～～～～～～～～～～

三人の死

高　勝義

ここ二週間の間に三人の死に遭遇した。一人は私と同じ午年の患者さんである。8年前に胃癌の手術を行ったのだが、不幸にも癌が再発してしまった。全ての真実を知り、抗癌剤などの治療を行いつつ、自分の身の回り全てをものの見事に整理して亡くなった患者さんである。

もう一人は私より少し年下の胃癌の患者さんである。癌の手術を行い、もうこれで大丈夫と本人はもちろん、私もその家族も期待したにもかかわらず、術後あっという間に再発してしまった。家族の希望にしたがって、本人に癌の再発について詳しく話さなかったのだが、多分再発である事を察知されていたのであろう、最後まで何一つ苦情を言わず、あっという間に亡くなった方である。

もう一人は同じ町内に住む私より少し年上の男性である。一ヶ月ほど前に、家の前で挨拶をしたばかりの全く元気な方である。

ある日突然心筋梗塞で亡くなってしまった。三人とも私の年齢と同じかその前後の方である。いよいよ自分にも死が近づいてきたなと、実感せざるを得ない。あきらかに死期を悟った死、何となく死を覚悟したであろう死、突然の死、自分はどんな死に方をするのだろうとついつい考えてしまう。

還暦を少し過ぎたばかり。まだまだこれからだと思ってはいるのだが、同級生に会ってその年老いた顔を見たり、周りで亡くなっていく人々を見ていると、自分に残された時間はあまり無いとついつい思ってしまう。妻と一緒に海外旅行をしたことも無く、趣味を楽しんだり、のんびりとした時間を過ごすことも無く、ただ仕事に追われて時間が過ぎてしまったように思えてならない。後自分に残された時を如何に有効に過ごすのか、自分の生が人々のために少しでも役立ったのか、これからどう役立たせたらいいのか、色々考えてしまう。

いつまでこの仕事を続けるべきか、早く辞めて老後を過ごすべきか、働けるうちは働くべきか、結論を出すのは真に難しい事である。早いか遅いか分からないが、いずれ死はやってくる。それまでの間、自分に与えられた使命を果たす事、毎日毎日を大切に過ごし、悔いの残らない一日にする事が大切なようである。　（山下病院　院長）

～～～～～～～～～～～～～